

アイラブ.....
シュウマイ？



椎名花穂



それは高校三年生の夏休みを控えたある夏の暑い日。
はっきりいってこんなにも暑いと少しくらい頭がおかしくなってもしかたがないと思う。
だから日頃から理系オタクと言われるあだ名を持つ彼も、
持ち前の変わった性格とこの暑さに受験勉強のし過ぎで
とうとうこの日頭がおかしくなってしまったんだと思う。

アイラブ.....シュウマイ？

あと数日でこの暑い教室から解放されると思うと嬉しいけど、
手放しで喜べないのは数日後に控えた期末テストが迫っているから。
いつものように長い昼休みは仲のよい友達と机をくっけてテスト勉強していたときのことだ
った。

「真衣、今日日直でしょ。黒板消すの忘れてるよ。」

一緒に勉強していた友達に言われて、黒板を見るとそこには前の時間に使用されたままになって
いる黒板。

すっかり忘れていた。自分が日直であることも、その日直が黒板を消すことも。

「黒板消してくる。」

そうやって席を立ち、黒板消しの任務を遂行する。

本当は黒板を消すのってあまり好きじゃない。だって消した残骸のチョウクの粉が手につく
から。

でもそんなことは言ってもらえない。早く消して、手を洗いに行って勉強の続きをするために。
このときのあたしはあまりに真剣に消していたものだから隣に人が来た気配なんて何にも感じて
いなかった。

「あのさあ。」

びっくりした。突然声をかけられて初めて隣にいた人に気づいた。

目の前に居るのは遠藤秋（えんどうしゅう）クラスメイト。そしてあだ名が理系オタク。
だからといって彼は外見も中身もマッドサイエンティストとかでは断じてない。
総合的に判断するなら見た目もそんなに悪くはないと思う。

ただあたしの好みじゃないけどね。

じゃあなぜそんな彼が理系オタクって呼ばれてるかって。それは、彼はなぜか理系科目だけはいつもトップの点数をキープしているから。だからいつのまにかそう呼ばれるようになっていた。ってだけの話。

そんなことより黒板消すのに夢中で彼の話聞いてなかった。

「俺とコンビ組まない？」

はっ???

オレトコンビクマナイ？

彼が日本語を話しているのは理解できるのに、彼の発言内容がはっきり言って理解できない。彼の放った言葉が頭と耳を素通りしたとでも言うのかな。

多分それは顔にも出てたんだと思う。

そして彼はもう一度同じ台詞を言った。

「俺と一緒にコンビ組まない？」

「コンビ？」

.....コンビ？

コンビと聞いて一番に浮かぶ単語はお笑い芸人。一瞬目の前の人と自分がコンビを組んで、お笑いライブをステージで披露する姿を脳内で想像してしまったのは多分この頭がおかしくなるくらいの暑さのせいだと思う。

絶対そうだと思う。

でも次の瞬間には背筋に悪寒が走ったりもしたけど。

「お笑いのコンビってこと？」

脳内で想像したままの疑問をぶつけて見た。

「全然違う。」

おもいきり否定された。だったら何のコンビよ。

「谷崎さんの下の名前は？」

あたしの下の名前？

「真衣だけど。」

それがなによ。

「じゃあ俺の名前は？」

「遠藤くん。」

「違う、下の名前。」

遠藤くんの下の名前？何だっけ？たしか.....

「秋。」

「正解。」

よかった覚えてて。

「じゃあもう一度聞くよ。俺の下の名前は？」

「秋。」

「谷崎さんの下の名前は？」

「真衣。」

もしかして.....

「もうわかったよね。」

なんて笑顔で問われても。

わかったけど、そんなくだらないことわかりたくないというのが本音で。

「俺たちシュウマイコンビとして仲良くできると思わない？」

全く思わない。むしろこんなことに付き合ってるヒマがあるなら英単語一つ思えたほうがためになる。

だから今思ったことを言ってやろうと思っていると、目の前に出された一枚のメモ。

しかたなく渡されたメモを見るとそ、こにはコンビ結成に伴う活動内容なんて書かれている。

ちょっと待って。あたし誰もコンビ結成した覚えなんてないんだけど。

「じゃあ目通しておいて。」

なんて言って去っていく後姿。

そんでもってここから動けないでいるあたし。

「谷崎さん、チャイム聞こえなかったの？授業始まってわよ。席に着きなさい。」

教室に入ってきた先生の声で意識が戻り、黒板から皆を一望するとあたしに向けられていた視線はさっきの彼とのやり取りを一部始終見られていたことを物語る視線の数。

恥ずかしくなったあたしは慌てて席に着いた。

はっきり言ってあたしとヤツ（あたしの中での遠藤くんのイメージは地の底に落ちたのだからこの際ヤツと呼んでやろう）の接点はクラスメイトという意外は一切ない。

あたしの席は廊下側の一番前の席でヤツの席は窓側の一番後ろ。

だからお互いの席は対角線上で一番遠い。

そんでもって苗字からわかるように名簿が近いとかでもない。

ほとんど他人といっても過言ではないヤツとなぜこんなことになってしまったのか。

机の上には渡された活動内容と書かれた紙と今の授業の教科書にノートが置いてある。

さっきあたしが消した黒板に字を書き進める先生を他所にさっきと同じ状態で

授業内容が素通り状態のあたしがいた。

「...い、真衣、真衣ってばあ。聞ってる？」

目の前にはあたしを呼ぶ友人の姿。

「ごめん、ボーっとしてた。」

「もう、ほら暑いんだから早く帰ろう。」

気づいたら放課後。やばい、すっかり授業聞いてなかった。

友人に急かされるままに帰り支度を始める。

「谷崎さん。」

げっ、ヤツのご登場。今度はなによ、って聞いたかったけどまたさっきみたいに教室でへんなこと言われるのはいやだからここは我慢して。

「ごめん、今日は先に帰ってて。遠藤くん用事があるから。」

そう言って友人と別れて、ヤツに連れられて着いたのは図書館。

席について教科書を出し勉強しだすヤツ。そんなことよりも、

「なんで図書館なの？そんでもってさっきのあの紙はなに？」

「見てないの？目通しておいてって言ったのに。」

そんな恨めしそうに見られても、あんな恐ろしいもの見るわけないでしょ。

「そんなことより谷、真衣物理苦手でしょ。テストもうすぐだよ。教えてあげるから勉強しよ。」

たしかに物理は苦手だけど。なんでそんなこと知ってるのよ。そんでもってそんなことよりも

「いきなり呼び捨て？」

「コンビなんだから。俺のことも秋でいいよ。」

そっちは良くてこっち全然よくないわよ。

でも先生よりもわかりやすく教えてくれた物理に免じて呼び捨ては許すけど。

コンビなんてわけのわからないものを結成した覚えは断じてないから。

と心の中で毒づいておかずにはいられなかった。

それから気づけば一週間。

友人の誘いを断ってヤツとの放課後の勉強にヤツとの帰宅。

そして、目の前には返却された物理のテスト。

信じられないことばかり。

「うわっ！真衣物理の点数どうしたの？」

友人がびっくりするのも無理はない。

それもそのはず、だって信じられないことに信じられないくらい点数が上がったんだから。

「やっぱ、遠藤くんのおかげ？」

ムッ、聞き捨てならない。

「なんでヤツのおかげなのよ。」

「だってずっと一緒に勉強してたんでしょ。そんなことよりこの前 遠藤くんにもらった紙になんて書いてあったの？」

目の前には人事だと思って楽しそうにしている友人。

あれから一度も見ていない紙を渡した。

「真衣、これ見た？」

「恐くて見てない。」

「別に怖いことなんて書いてないから、見てみなよ。」

手元に戻ってきた紙を見ると。

<活動内容>

- ・一緒に帰る。
 - ・一緒に勉強する。
 - ・一緒に野外活動を行う。
 - ・頻繁に情報交換する。
-

確かに恐くはないけど。

「何これ？意味わかんないんだけど。」

「本当にわからないの？真衣はニブイなあ。遠藤くんは真衣のことが好きなのよ。」

「これのどこに好きなんてかいてあるのよ。」

あたしが友人を見ると友人はなんだか同情した眼差しであたしを見ている気がするのあたしの気のせい？

「だってこれ付き合ってる二人が普通にすることじゃない。野外活動ってこれは多分デートのことでしょ。」

頻繁に情報交換ってこれはメールとか電話をするってことじゃない。」

これ見てわからないなんて真衣もまだまだね。なんてありがたくもないお言葉をもらう始末。

「ほら遠藤くんが来たよ。」

テストも終わったから久しぶりに友人と帰ろうと思ってたのにその友人に送り出されての帰宅。

目の前には少しの距離を空けて歩くヤツの後姿がある。

「遠藤くんさあ。」

「コンビなんだから遠藤くんじゃなくて秋ね。」

こだわるなあ。もしかしてよっぽどシュウマイがすきななの？それとも？

「秋はさあ、もしかしてシュウマイじゃなくてあたしが好きなの？」

振り返ったヤツは、

「今頃気づいたの？」

なんて言う。目の前のヤツは可愛くない台詞にヒネクレタ告白と態度であたしを意地っばりにさせるのに。

でも振り返ったときに見せた顔は少しだけ可愛かったから、あたしは目の前のヤツを抜かして歩きだす。

「いいよ、今のところコンビ続投ね。でも卒業と同時に解散かもしれないけど。」

「のぞむところ。」

暑い夏のせいで狂った頭に、受験勉強のせいでイカレタ感情。

こんな恋の始まりも……ありかもね。

アイラブ.....シュウマイ？

<http://p.booklog.jp/book/31729>

著者：椎名花穂

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/meltwithyoukiss/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31729>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31729>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.